来し方を振り返って
──山本先生にお聞きする──

それではこれから山本先生にお話を伺いたいと思います。
山本先生は2005年３月に定年を迎えられ、立命館大学を御退職されます。そこで退職記念論集を企画し、各先生方に掲載原稿をお願いしているところです。
今日は、山本先生ご本人に、生い立ち、研究者として活躍してこられたお話、とくに研究生活を中心にお聞きして、退職記念論集に掲載し、みなさまに読んでいただこうと考えております。
本日のインタビュアーは、山本先生と同じ法学部で外国語教育に携わってきました山口先生、石原先生、それから、私、竹治の三人がつとめさせていただきます。
よろしくお願いいたします。

では、山本先生の生い立ちからお聞かせ願いたいと思うのですが、最初に、私のほうから簡単にご紹介いたしますと、1939年５月、新潟県にお生まれになりました。ご兄弟は４人。末っ子でいらっしゃいます。
1946年、小学校に入学されました。中学、高校とは地元の学校に進まれ、1959年、東京教育大学に進学されました。
1963年に卒業後、京都府立桂高等学校に勤務され、２年間の勤務後、京都教育大学付属高校に勤務、５年間務められました。
その後、1970年、立命館大学法学部に助教授として勤務されました。76年、教授となり、現在に至る、ということでございます。

□それでは、幼少時代、新潟で過ごされたころのお話からお聞かせ下さい。

山本

生まれた場所というのは、今でも心に残っています。母親が亡くなった後は、家も売却し、今は何もそこには残っていないのですが、墓参りだけはしなければ、と思っています。

私が育ったところは、越後平野の米どころの真ん中、といってもいいくらいのところで、本当に田舎でした。その環境は、子どもの私にとってはありがたいものでした。

新潟で育って、心に残っているのは、父親の亡くなったときのことです。小学校２年生のときですね。戦争直後で、生活が苦しい状況のときでしたので、十分な治療も受けられずに亡くなったと聞いています。

臨終のとき、亡くなるときの様子というか、最後に顔に白い布を掛けるときのことは、小さいながらも、このようにして別れるのかな、という思いで見つめていたことを覚えています。その光景が、小さいときの思い出で一番心に残っているものです。

その後は、４人の兄弟を母親が一人で育てたわけです。母は父が存命中は仕事をしていなかったのですが、父が亡くなってからは生活を支えるために、村の小学校の先生になりました。

その生活がどのようなものであったかというのは、今でも忘れられません。母の生まれた家というのは、私たちが暮らしていた家から10キロほど離れたところにあったかと思うのですが、私の家庭が経済的に困っていたので、母が私の上の姉に「実家に行って食べ物をもらって来て欲しい」と頼むわけです。歩いて行くには非常に遠い道のりでした。帰ってきた姉が「遠くまで乞食のように食べ物をもらいに行くのは絶対に嫌」と言ったのをよく覚えています。私が８歳くらいでしたから、姉は多分16歳だったでしょう。この当時が世の中を見るという点で私の出発点であったと言えます。

冬、学校から帰ると家に帰ると誰もいなくて、寒い部屋で自分が炭をお

こし、こたつを用意して、夕方誰かが「ただいま」と言って帰ってくるのを待っていたことを今でも忘れられません。そのときの寂しさというのが、寒さが加わって、今でも心に強く残っているわけです。
きっと楽しいことも沢山あったのでしょうけれども、寂しいことやつらいことのほうが、いつまでも忘れられないものですね。

□雪はたくさん降りましたか。

山本
当時はたくさん降りましたね。越後平野は今はあまり降らないんですけれども、当時は１メートルは積もりました。

□中学、高校と地元で学ばれていた当時、初恋の思い出などをお聞かせください。

山本
それは、後で席を変えて話をしましょう。どうぞお楽しみに。
中学校ですが、それは村の中学校ではなくて、隣りの町の中学校に行きました。はじめて町の中学生たちといっしょになり、田舎と違ってみな活発で、驚きました。私は、そういう周りの生徒たちを黙って見ているほうだった、と思います。
高等学校はもうすこし遠く、母の実家近くの学校でした。
忘れられない思い出の一つは、修学旅行の事前検診で、校医さんから「おまえは行ってはいけない」と言われたことです。京都へ行く修学旅行だったのですが。少し心臓が弱かったのですね。

□それは運命の女神が「後に京都で永く暮らすことになるのだから、今、

行く必要はないよ」と告げているような話ですね。

□その時来ていたら、京都には来なかったかもしれませんね。

山本

それはあり得ます。

□小学校、中学校、高校のクラスはどのくらいの人数でしたか。当時は、結構多かったですよね。

山本

小学校は30人くらい、中学校、高校は40人から50人くらいでしたね。

□小・中・高の生活と後の生活との関わりという点で、先生はのちに英語文化という方面の研究へおもむかれるわけですけれど、小さい頃の異文化体験、英語体験が何かあって、英語なり、異文化への興味が湧いて研究に向かったということはありませんか。

山本

そういわれると、ああ、そうかな、と思い当たるのは、中学校に入ったときの英語の先生が米軍の通訳をしておられたという噂のある先生だったということです。

非常にきびしい先生で、私も怖かったのですが、きちんと勉強をさせられました。そのことが基礎になっているのかもしれませんね。

□その頃に読んだ本とか、雑誌とかはどんなものでしたか。

山本

本屋というのが村にはなかったので、小学校のときに特に読んだ本はこれだという記憶はありません。家にあった文学全集を読み始めたのが中学生になってからです。芥川が好きでした。町の本屋で男の子向けの『譚海』という雑誌をよく立ち読みしたことも覚えています。

□たしかに、本屋というのは無かったですね。少年少女なんとか、という雑誌がありましたが、私なんか貧しかったから買えなかったけれど。

山本

先ほどもお話しましたように、食べ物を母の実家へもらいに行くような状態でもありましたし。家の前にある小さな川で魚釣りをやったりもしましたね。魚を釣って、それをおかずにしました。

□私はもう少し後の時代に育ちましたが、それでも貧しいことは貧しい暮らしでしたね。食べ物に関してはね。

□勉強はお好きだったのですか。

山本

そんなことはありません。スポーツはよくやりましたよ。中学校ではマラソンはいつもほぼトップ・グループで走っていました。

□持久力、忍耐力がおありだったんですね。そのような小、中、高時代を経て、東京へ行こうと志されたのには何か目的とするものがあったのか、それともたまたま行かれたのでしょうか。

山本

新潟県の場合は、何か自分でやりたいと志した場合、大方の人は東京へ行きましたね。そういう意味では、東京へ行ってみようか、という流れのなかにいたといえます。

□専攻は英語教育ですか。

山本

英文学科です。東京教育大学の。

□ここに進まれたのは、英語を専攻して何かをやりたいと思っていたのですか。

山本

教員になりたいと思っていました。
父も母も教師であったという環境で育ちましたから。英語を専攻したのは、先ほどいいました中学校の先生の影響があったからかもしれませんね。

□大学ではどういう生活を送っておられたのですか。書物に没頭した学生だったのか、それとも・・・

山本

全然、そうじゃなかったです。友達と楽しく遊んでいた生活でしたね。
適当に勉強もしていて、学友たちと読書会などもやりました。
大学では１クラス15名で、それが２クラスあったのですが、気の合うものが集まって、よく池袋に出て飲んでいました。
下宿は池袋からの西武沿線にあって、他の大学の学生ばかりが下宿して

いた小さな家でした。
大学時代に頑張ったことの一つは、アルバイトかもしれません。経済上の理由で、週二日の家庭教師を二つ持っていました。そうすると、なかなか時間的に余裕がなくて、サークルには入りませんでした。

□その頃の授業料は今から思えばかなり安かったですね。半期１万円未満でしたね。

山本
奨学金も貰っていました。

□59年入学ということは、60年安保があったり、政治的に動きのあった時代ですね。そういう政治的な活動に巻き込まれた学生だったのですか。

山本
60年安保闘争に出会ったことには非常に感謝しています。ノンポリの学生としてよくデモに参加し、世界の進む方向を一人ひとりの力を合わせることによって変えられるものだ、と思っていました。国会議事堂の前をデモしていたとき、「ハガチーの来日が中止になった」と誰かが大声で叫び、一斉に拍手が起こったことをよく覚えています。政治を動かせ、世界を動かせ、ということを皆が思っていた時代ですね。
当時、東京教育大というのはひとつの学生運動の拠点だったんです。そういう意味では、ほとんど授業のないような状態でしたが、そんな状況のなかで、これもまた忘れられない光景でしたが、国会議事堂に行くために地下鉄に大勢で乗り込んで、労働歌を歌った、ということもありました。乗客たちもいっしょになって、歌いました。そんな時代でした。

□大学紛争時とはまるで違いますね。

山本

授業に出ると、先生から、「君たちは黙って授業に出ているだけでいいのか」と声がかかるという時代でした。このような運動、社会の動きに巻き込まれて良かったと思っています。巻き込まれたというより、そんな運動に自由に容易に参加できたことに感謝しています。

□そういう経験がどこかで学問に結びついてくるというか・・・

□当時の英文科というのは、アメリカ文学が研究の中心だったのですか。

山本

イギリス文学が主流でした。アメリカ文学は限られた人たちが研究している程度だったと思います。
ゼミの先生は末永国明先生で、当時アメリカから帰ってこられたばかりで、先生のお話は大変刺激的でした。

□大学時代の浮いた話はないのですか。

山本

それも後で、席を変えて話をしましょう。

□４年間で卒業され、63年に就職されたのですが、なぜ、京都の桂高校まで来られたのですか。

山本

一つは、やはり、高等学校のときに修学旅行で京都に来られなかったということがあります。また当時、京都の革新府政というのが非常に有名でした。それが東京にいても聞こえてきていました。

たまたま生徒の急増期でもあり、東京教育大を出た学生は日本全国どこにでも就職があった時代です。新卒は最初、相当不便な地域に配属されるそうなのですが、最初から市内に勤務できまして、それだけ教員に対する需要があった時代なのですね。

それから65年に、京都教育大学に付属高校が開設され、そこへ誘われました。

結婚したのもこの頃です。媒酌人が桂高校の校長先生でしたから、結婚までの経緯についてはどうぞご自由に想像してください。

□教員時代はもっぱら教育に専念されていたのですか。何か、将来は研究をしたいという思いが、もうおありだったのですか。

山本

特にありませんでしたね。ただ、当時、黒人研究が関西で盛んだったのです。その研究会の主要メンバーに法学部の伊藤堅二先生がおられ、私の友人から先生に紹介されたのです。附属高校に移ってからです。

□この頃で一番大きな思い出というのは何ですか。

山本

一つは、ケネディー大統領暗殺事件ですね。当時、高等学校では教員の宿直制度があって、たまたまその日の宿直に当たったのです。朝、テレビをつけると、「ケネディー大統領暗殺」というニュースが流れてき、こ

れも国会議事堂前をデモしたときの感覚と同じですが、今、政治が、世界が動いている、という思いに囚われました。

□あれは、衛星放送でアメリカからのニュースが入ってきた最初のニュースだったんですよね。

山本

そうでしたか。繰り返し、繰り返し、このニュースが流れてましたね。
後のベルリンの壁の崩壊など、世界が動く、そんな歴史的な場面を体験したという思いがしています。
もちろんプライベートでもいろいろあった時代ですけれど。

□では70年代に大学に赴任されたのは、大学紛争がおさまりかけたころですか。
まだ法学部は小さかったですね。英語の先生は何人おられたのですか。

山本

私を入れて５人だったように思いますが、正確でないかもしれません。

□広小路に学舎があった時代ですね。大学に入られて、高等学校での勤務とは違うと感じられたことなどはありますか。

山本

就任して間もなく学生との団交がありまして、その時に、教員に向けて紙つぶてがいくつも飛んできたのが印象的でした。「これが大学か」と思いました。

□そのころから研究生活が本格的に始まる、ということですね。

山本
しばらく右往左往で、何をどうしたらいいのかわからない状態で、当時アメリカで注目されてきた作家たちの作品を少しずつ読んでいました。

□日系文学に関心を持たれたきっかけは何ですか。

山本
たまたま二世作家のヒサエ・ヤマモトさんと親しくなったものですから。彼女の「十七文字」という短編を読んで日系文学というものの存在を初めて知ったのです。しかも名前が同じヤマモト。住所をあれこれ調べ、ようやく見つけて手紙を書いたら、好意的な返事がきました。そういうことでのめり込んでいったんです。ほんとうに、たまたまでした。

□当時、ヒサエ・ヤマモトさんは何冊か発表されていたのですか。

山本
そうではありません。ヒサエさんの短編集が初めて出版されたのは1988年です。10代のときからよく日系新聞に書いていて、かなり知られた存在だったんです。1930年代のことです。

□アメリカで生まれた人ですか。

山本
そうです。

□彼女の作品を最初に読んだときの印象はどういったものでしたか。

山本

アメリカ文学にもこういう分野があるのだ、という発見ですね。今までアメリカ文学は黒人系、ユダヤ系のものを少しずつ読んでいて、それはそれなりに表現しようとしているものは分かるのですが、それがあるとき、主人公の名前が日本人の名前で、描かれる社会も私たちの住んでいる社会に近く、しかも俳句をキーワードとして書かれる作品がアメリカにあるのを知り、とても新鮮な感じでした。
当時、日系人のことを詳しく知っていたわけではなくて、むしろ、そこから歴史的なことにも入っていったわけですけれども、身近さを感じましたね。作者自身が私を励ましてくれるような、そんな文学でした。

□彼女は何歳くらいの方なのですか。

山本

1921年の生まれですので、今は80歳を超えています。

□87年、88年ころから本格的に研究を進められたのですね。

山本

そうです。当時、アジア系の文学とか日系の文学をやっている人は非常に少なかったものですから、まずは資料を集める必要がありました。
1987年、在外研究員としてウイスコンシン大学へ行きました。1930年代のアメリカ文学を研究しておられたライドアウト先生から1930年代の社会の動きを教えてもらいながら、図書館で日系関係の資料をコピーしました。

また、ウイスコンシン大学に居ながら、シカゴへ行ったり、ニューヨークへ行ったり、カリフォルニアへ行ったりと、いろいろ動きました。その時、ヒサエさんと直接会うことによって、私の日系文学への関心がさらに大きくなったのです。それから、日系人について研究している何人かの研究者にも会うことができましたので、そういう意味では、この1年間は意義深かったですね。
1988年はいわゆる日系人の強制収容に対する謝罪と賠償が正当であると政府が認めて、その法案が成立したということもあって、政治的にも大きく動いた時代でもありました。

□最初に出会われたのがヒサエ・ヤマモト。その後、次々と出会いがあったのですね。

□私は88年の秋に立命館に来ました。88年の９月だったか、歓迎会をやってもらって、そのときに山本先生が帰ってきたばかりだとおっしゃっていました。
そのとき、はじめて山本先生から日系文学をやっておられるとお聞きしました。私も植民地の文学には興味がありますと言ったのを覚えています。当時、日系文化研究会に参加させてもらっていたのです。

山本
その研究会は昨年終りました。しかしその後、いろんなところにその力が広がってはいますけれども。

□日系人に興味を持って、研究しようという流れが起きてきて、それが日系文化研究会となり、それがさらに、日本移民学会へと広がっていったということですか。

山本

ある意味ではそうかもしれません。が、逆に、移民学会の活動に影響を受けて、よい影響ですが、研究会が活動を続けてきたともいえます。
1987年の1年間の在外研究のなかで、もう一つよかったことは、日本語文学の作家に出会うことが出来たことです。アメリカ文学というのは、基本的には英語で書かれたものですが、そういう文学とは別に、日本語で書かれた文学も存在するということを知ったときは少々驚きました。カール・アキヤさんはそんな作家の一人でした。彼とは、ニューヨークで、人の紹介で会うことができました。

□二世ではなくて、日本で生まれてアメリカに移られた人ですか。

山本

アメリカで生まれ、日本で教育を受けて、アメリカに帰った人です。帰米二世と呼ばれています。親が日本の教育を受けさせたかったのです。
本来は二世なのですが、言葉が日本語ですから、アメリカで生まれ、そのままそこで生活をしてきたヒサエさんたちとは住む世界も、書く文学も全く違うことになります。日本の価値観を持っていたので、戦争が始まってからは、アメリカ当局からすれば犯罪者のような存在になったのです。カール・アキヤさんは、社会主義的とまではいかなくても、進歩的な、民主的な人でしたけれど。ニューヨークに住むそういう人たちが集まって、日本語文学のサークルをつくったのです。

□日本語による文学ですか。

山本

そうです。日本語文学です。

□日本では、日本の文学史のなかではほとんど無視されているけれど、アメリカ文学のなかではどうですか。

山本

日本語は読めないから、アメリカ文学としては評価されていません。

□植民地だった台湾には台湾人が書いた「日本語文学」があります。これなども日本近代文学史にはほとんど入ってきません。

□日本語の出来ない二世の人たちが書く文学と帰米二世による日本語文学とは、テーマなり、創作意図なりに関して共通点とか、違いとかはどうなっているのでしょうか。異邦人としての位置をテーマにとりいれた文学が多いのか、それとも、そういったことにとらわれずに、世界共通の愛の問題であるとか、あるいは、人間関係の問題を扱っているのか、そのあたりはどうなのでしょう。

山本

難しい問題で、ちょっとお手上げです。しかし大筋として、二世の英語文学は、あくまでアメリカ社会の中の少数民族としての意識から生み出されたアメリカ文学であり、帰米二世の日本語文学は、移住者としての一世の文学に近い文学である、といえるでしょう。

具体的には、1930年代の二世文学は希望、恋、生と死といった青春の普遍的テーマを扱う作品が多く、日米関係の悪化とともに、アメリカ市民としての姿勢を示す作品も書かれるようになります。戦時中は強制収容所内の日々の生活を複雑な感情を持って描き、戦後の文学では合衆国への忠誠問題が大きなテーマとなりました。

他方、帰米二世の戦前の作品は社会や自己の在り方を問うものが多く、

一世の親との心理的葛藤をテーマとする作品もよく書かれました。戦時中の文学には日本への想いを語る作品とともに、収容所生活を新しい日本語文学を作るためにテーマとして取り上げる作品も見られます。そして、戦後の帰米二世作家たちは批判的な気持ちで収容所生活を描いています。二世の文学と帰米文学とでは、共通点よりも相違点が多いと思います。

□日本語文学というのは過渡的なものなのですか。今も存在するのですか。

山本

今もあります。戦後、アメリカへ渡った人たちが日本語で小説や詩、短歌、俳句を書いています。
最近、日本の若い国文学者に出会ったのですが、彼は日本の近代文学をやっていて、アメリカにおける日本語文学をも取り込む研究をしようとしているのを知りました。日本文学、日本語文学という今迄の枠組みが変わる可能性がある、と思っています。

□『日系アメリカ文学雑誌集成』ですが、これは全部で22巻ですね。いただいた資料によれば、この資料的価値が認められたということですか。

山本

そう理解しています。2002年に発行された『アメリカ大陸日系人百科事典』の中で日系アメリカ人に関する文献が載っていますが、その文献がこの資料です。その文献の一つとして『雑誌集成』が取り上げられているのです。『雑誌集成』の中味ですが、1930年代から1980年代までに発行された日本語の文芸誌を集めたもので、8種類の雑誌が収められています。

□この資料に100まで番号が振ってあるのは、100の重要な資料という意味ですか。

山本

そう考えていいでしょう。100の文献が選ばれ、それぞれにごく短い解説がついています。そうです。『雑誌集成』の中で私が集めたのは、『NY文芸』という、カール・アキヤさんのグループが発行した同人誌です。
日系文学というと西海岸の人たちが書いたものと一般に考えられ、東海岸で書かれた文学は無視されてきました。その意味で『NY文芸』は貴重な雑誌です。

□その時代の文芸資料としては、ほとんど網羅しているのですか。

山本

重要と考えられているものは、すべて網羅してあります。
雑誌を集められた篠田左多江先生が偉いな、と思うのは、毎年アメリカへ行って、雑誌を持っている人と親しくなり、その人が篠田先生なら大丈夫だろうと思って、最後は資料を提供してくれたんですから。日本から行って、すぐに「ハイ、ドウゾ」ということはないのです。何年も通い続けるんです。彼女は日本語文学研究においては、トップの人です。

□日系文化研究会の活動のなかで、研究テーマに沿った研究の推進以外に何か力をいれて来られたというものはありますか。

山本

資料の収集ですね。日系新聞のマイクロフィルムと復刻版の資料の収集です。

お金の出所は、主に科学研究費でした。集めたマイクロフィルムの数はおそらく日本の大学の中では有数のものだと思います。
他の大学の研究者にもどんどん使ってほしいのですが。

□文学作品はマイクロフィルムに保存されているのですか。

山本
そうです。日系新聞は文学作品の重要な発表の場でしたから。

□もちろんこれからの課題はたくさんあるのでしょうけれど、山本先生が中心になってやられるのでしょう。

□これからは学校の仕事が無くなるわけですから、研究に邁進される時間ができるのはうらやましいな、と思います。

山本
二つのことをやりたいと思っていて、その一つが1930年代の文学です。この時代の文学は作品を手に入れることが難しく、今迄ほとんど研究されてこなかったのですが、日系文学の歴史の中では面白い時代です。
若い二世たちが英語で書く文学が生まれ成長した時代で、同時に一世と帰米二世による日本語文学も盛んな時代でした。これら二つの文学の間に交流が見られたのはこの時代だけです。
それからもう一つやりたいことはハパの文学です。ハパ（Hapa）というのはハーフ、アジア系の血を引く混血の人を指しますが、そういう人たちの文学です。アジア系、日系の新しい存在として彼らが文学を通して何を訴えてきたのかを歴史的にも探りたいのです。

□使用する言語は何語ですか。

山本

私が対象とするのは英語です。日系の場合、異民族結婚をした日本人にとって日本語は大切な言語ですが、ハパである二世たちは英語化されてしまいますから。

これ、HIFの会員カードです。HIFはもっとも有力なハパの運動組織で、本部はカリフォルニアのバークレーにあります。私も入れてもらっています。

□最後にお聞きしたいのは、授業の実践の報告などもたくさん書いておられまして、そういう方面の研究もされているので、私たちに対する教えも含めて、何か伺えたらと思います。

□それに加えて、外国語教育がだいぶ変わってきましたね。
大学改革において法学部の外国語教育がどんな具合に変わってきて、今の段階で、英語がどういう方向に行こうとしているのか、かなりはっきりとお考えがあるのではないか、と思いますので、その辺りをお聞かせ下さい。

山本

二つの点で考えたいと思っています。

外国教育をどういう方向、どういう方法で進めるかという問題と、それを進める体制の問題です。最初の点については、法学部の英語部門として、学生がそれぞれの到達点をふまえてさらに力を伸ばすために、いわゆるコンテント・ベーストを取り入れて授業を組み立ててきました。語学的なスキルの重視を、内容と結びつけて行なう授業です。

ことばというものは本来、その背後にある社会と文化から切り離せないものですから、ある意味では当然の授業方法でもあるのですが、学生の学習意欲を引き出す点からも、かなり成果を上げてきていますので、これからもさらに改善を図りながら積極的に進めていってほしいと思っています。

体制の問題ですが、端的にいえば、我々法学部の外国語教員が外国語教育のあり方について十分論議をするために、どのようにして共同体制をさらに強化していくかという問題です。伝統的に法学部の外国語教員のまとまりは非常によく、みんなでよく集まり、重要な問題を議論してきました。この点、法学部で教えることができて、私はとても感謝しています。しかしここ数年、教員それぞれがとても忙しくなり、なかなか集まることができません。メールで意見を交換して補っていますが、最近は外国語教育の根本に関わる問題がよく上から降りてくるようになっています。厳しいスケジュールの中で大変でしょうが、ぜひ法学部外国語教員の良き伝統を守り、法学部の現場の考えをまとめて、それを全学に提起していってもらいたいと思います。

□今日は、貴重な話を聞かせていただいて、ありがとうございました。
今後も、まだまだ研究も続けていただいて、今まで未開の分野を切り開いていただきたいと思います。私たちも教えて頂きながら、やっていきたいと思います。
本日は、どうもありがとうございました。